

【要約】

中国における「包」と「市場の秩序」

—— 農民工の「主観」から読み解く「中国的なるもの」

本論は、筆者が、1990年代初頭から研究対象とする農民工と、2010年以降、研究を進めている「包」という一つの経済システムを同じ土俵に載せ、「中国的なるもの」としての「市場の秩序」を読み解く試みである。そして、これら二つの異なる研究課題を結び付けるものは、筆者がこれまで農民工を対象として実施してきたアンケート調査を通して明らかとした彼らの「商売を始めたい」という「主観」にほかならない。言い換えれば、農民工の「主観」を一つの起点として、「包」に基づく「市場の秩序」とはいかなるものであるのか、その諸特徴を明らかにすることである。

もちろん、「包」に従い「商売」を行っているのは農民工だけではない。本来、「包」論を展開するためには中国人すべてを対象とすべきであろう。しかし、農民工の「主観」を中心に「包」論を展開することは、戸籍制度、二元的社会構造、「低学歴・低賃金」層、経済成長を下支えする一群などという枠組みでは、決して捉えることができない農民工の存在を白日の下に晒すことになる。言い換えれば、「包」を通して豊かになる農民工の存在は、既存の社会像を形骸化させ、新たな社会像を必然的に浮かび上がらせることになるといえよう。いうまでもなく、「包」とは、そこに参加する条件として、戸籍の違い、地縁血縁という生得性が問われることはない。それゆえ、「包」という「市場の秩序」の下で、農民工は、戸籍に縛られることなく、都市住民と交わりながら「商売」を始め、そのような状況は、既存の社会の変容を余儀なくしていると想像することは決して難しいことではない。もっとも、本論では、新しい社会像を浮かび上がらせることが目的ではなく、あくまでもこの問題に挑むための前提条件として、誰もが参加できる実に開放的な「包」という「市場の秩序」の特徴を提示するに過ぎない。しかし、中国社会における特殊的な存在（戸籍制度による差別的な待遇）ともいえる農民工を中心に描くことは、社会の変容を読み解いていくためのもっとも適切な素材にほかならないといえよう。

さて、本論では、以上のような問題意識の下、次のような方法で分析を進める。

まず、序章では、レッシング、アーレント、ハイエク、ウェーバーに依拠しながら筆者の研究スタイルを開示した上で、「主観」、「客観」、「靈感（ひらめき）」についての考察から始める。そして、「靈感（ひらめき）」こそが、研究者にとってもっとも重要な資質であるというウェーバーに従いながら、中国社会に潜む「灵感（ひらめき）」を探し出すための「主観」の重要性を明らかとした。

第1章では、トヨタ生産方式と管理教育によってデザイン化された「日本的なるもの」としての筆者の「主観」をさらけ出す。そして、デザイン化された下での研究の限界性を明らかにするとともに、そこから離脱することによって始めて中国社会に埋め込まれている「秩

序」の存在、さらに、中国社会の「自由」を発見するまでの経緯を提示した。そして、中兼、柏、内山によって導き出された「自由」を再検討しつつ、「自由」を再構成するものは何であるのかという一つの問題提起を行った。

第2章では、筆者の約30年におよぶ農民工研究を振り返りながら、自省的にその研究・調査方法を辿った。自省的の意味とは、デザイン化された視点、あるいは通俗的な言語に縛られたもとの研究を続けた筆者自身の大いなる反省を指す。具体的にいえば、「半市民」、「二等公民」という通俗的な言語で農民工を捉え続けたことである。しかし、筆者は、デザイン化からの離脱を通し、自らの「主観」を形成する過程において、農民工を「半市民」、「二等公民」と捉えることに強い抵抗感を持ち始め、むしろ「半市民」、「二等公民」＝都市住民と考えるに至っている。とくに、「自分の子どもの数を決めることができない人びと」を「市民」と呼ぶことに強い違和感を抱かざるを得ない。しかし、このような「半市民＝都市住民」について論を進めると、本論の主旨から逸脱する恐れがあるため、本論では、戸籍制度の問題、差別的な構造に対する批判（とくに先行研究に対して）はできるだけ抑え、あくまでも自省的に論を進めた。ただし、本論における農民工に対する視点は、このような「半市民＝都市住民」論、もちろん、「農民工＝市民」という構図が成立するわけではないが、少なくとも都市住民と比べれば、権力から距離を置き、または権力を相対化する力を有し、地縁血縁者を基礎とする生得的ネットワークで自らを守る術を知る農民工を市民的であるとする考えが根底を支えていることはいままでもない。また、上述した「新しい社会像」とは、経済活動を通して市民と半市民とが交じり合いながら、形成されるのではないかという一つの仮説が含まれている（もともと、本論においてこの点まで言及しているわけではない）。

第3章では、筆者の上海市郊外における農民工調査に基づき、都市と農村の間に忽然と姿を現した「農民工社会」の誕生、そして、その空間において管理体制の外側に生まれた「自由」の存在、それを農民工が享受しているという特徴を明らかとした。とくに、農民工とは、一方において、生活や仕事面で、生得的ネットワークに依存しているのだが、他方では、生得的ネットワークの枠を越え、農民工が自らの手で民工子弟学校、診療所、労働紹介所などを核とした「新しい社会」を作り出していく姿を紹介した。まさに、それら諸施設は「新しい社会」の象徴であり、管理体制の外側における「自由」を確たるものしていく農民工の動きとして、筆者に感動をもたらした。しかし、政府当局によって「新しい社会」は破壊・消滅し、筆者は、絶望のあまり農民工についての言葉を失うことになった。ただし、農民工の子どもたちの兄弟数の多さを再認識するなかで、上述したような「農民工＝市民」という構図がおぼろげながら浮かび、「自分で子どもの数を決めることができる農民工」に対するこれまでとは異なる視点を模索し始めることになる。ただし、「農民工社会」において生得的ネットワークに依存することは、「閉鎖的で小さな社会」を形成するに過ぎず、その役割の限界を示しつつ、「包」的営みに参加することによって、「開放的で大きな社会」へと続く道を提示した。

第4章では、まず、筆者が農民工に依頼して作成した「家計簿」から彼らの貧しい生活状

況を具体的に紹介した。しかし、彼らが貧困生活のなかでも、都市における生活に対して高い満足度を抱いている事実を、筆者が、1990年代から繰り返し実施してきたアンケート調査の結果から明らかとした。そして、高い満足度の要因として、「和諧社会の促進」、「故郷の生活との比較」、「故郷における生活水準の向上」、「都市における豊かさの実現と消費の刺激」、「農民工社会における自由度の拡大」を挙げ、それぞれの要因について分析を加えた。その上で、これらの要因では、高い満足度の背景を説明することは不十分であり、「商売を始める」という希望が実現すれば、戸籍制度によって降りかかる理不尽ともいえる所問題を解決することができ、または、なかなか希望を実現化することが出来なくても、「包」のシステムがある限り、彼らは、未来を描くことが可能となり、それゆえ、満足度は高くなることを明らかとした。

第5章と第6章では、江西省鷹潭市の学歴水準が異なる4つの高校で実施したアンケート調査、および浙江省海寧市で農民工（戸主）に対するアンケート調査結果から、高校生から都市で働く農民工が、それぞれ「商売を始めたい」という希望を強く抱いていることを明らかとした。そして、玄田有史の「希望学」を参照とし、彼らが抱く「希望」の実現性を追求した。なかでも、農民工については、具体的に彼らが商売を始めるために不可欠な人間関係について、生得的ネットワークとの関係性、さらに、都市において新たに形成された人間関係について、その交流方法（主に宴会）を踏まえて分析を試みた。

第7章と第8章では、第6章までの農民工に関する分析から翻って、「包」について、先駆者である柏祐賢と加藤弘之のそれぞれの「包」論を紹介し、筆者の「包」についての見解を提示した。とくに、両者が見落とした、スクラップ&ビルドの機能こそが「包」の中核にほかならない点を強調した。言い換えれば、柏と加藤は、時代の通俗的な言語（経済の停滞と発展という現象）に囚われすぎたこと、さらに、発展論的思考に縛られ続けたことによって、スクラップ&ビルドの機能を軽視し、自由や社会そのものが再構成される中国社会の重要な特徴を見落としてしまったといえる。そして、両者の「包」論を継承しつつ、最終的には、ハイエクの「自生的秩序」論を絡ませながら、「包」とは、「人びとが伝統や習慣のなかから経済の発展と停滞のそれぞれの要因を内包し、利潤と自由を求める積極的「主観」に基づき、スクラップ&ビルドを繰り返す秩序」と定義した。そして、この相矛盾する要因を内包し、決して直線的な発展論を描き切れないという特徴こそが、「中国的なるもの」として「市場の秩序」であることを明らかとした。

終章では、筆者の体験に基づく「奇妙な宴会」を紹介し、誰にでも開放された一つの空間としての「宴会」の存在を、「包」への入り口であるとともに、「市場の秩序」を学ぶための空間であるとした。そして、この宴会を開くことは、人びとの「主観」的な行為の結果であり、このような「主観」が存在する限り、「包」、あるいは「中国的なるもの」としての「市場の秩序」は再構成され続けることになるであろうという一つの仮説を提示した。